
二人の少女

麻雛琥桃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二人の少女

【Nコード】

N2651BA

【作者名】

麻雛琥桃

【あらすじ】

少女は目の前の現実から逃げだした。その少女を招き入れた少女。

そんな二人の日常のワンシーン。

<ここは現実? ここは異世界? それとも……>

「マリヤ！　ねえ起きて！　マリヤ！」
私を呼ぶ、少女の声。

その声の主に自分の目が覚めたことを伝えようとした瞬間。
とう！　という威勢のいい掛け声と共に声の主が自分の上に勢いよくのしかかってきた。

ぐえという変な音が口から思わずこぼれる。

「アリス様！　私はもう起きました。だから……その、どいても
られないでしょうか？」

重い。とは一切口には出さずあくまでやんわりと告げると自分の
上にのしかかっていた少女　アリスは素直にひいてくれた。

「ねえ、マリヤ。私、もうお腹がペコペコだよ」

まるでガラス玉のような、淡い水色の瞳がこちらに向けられる。

私はそんな主人のために、すぐさま食事の準備に取り掛かるこ
とにした。

「何が食べたいですか？」

「オムライス！」

「かしこまりました」

手早く着替えを済ませ、キッチンに入る。

冷蔵庫を開けると、オムライスの材料とアリス様の大好きなオレ
ンジジュースの缶だけがきちんと入っていた。

「一体、この冷蔵庫はどういう仕組みになってるのかしらね……」
自分がここに来て　たぶんしばらく経つというのに、いまだに住
んでいる屋敷の不思議さにはついていけない。

目の前の冷蔵庫もどこの家庭にもありそうな平凡なモノに見える
が、実は魔法の道具の一種で、自分が望んだ材料や飲み物が必ず出
てくるという非常に便利なモノである。

このような魔法の道具がこの屋敷にはたくさんあるのだ。

素早く作った二人分のオムライスとコップに注いだジュースを持って私は主人のいる部屋へ向かった。

「アリス様、お食事をお持ちしました」
返事がない。

また、読書に夢中になっているのだろう。

そういう時は絶対にいくら呼んでも反応してくれないので主人の座っている机へ向かうことにした。

主人の部屋には、本がところ狭しと置いてある。天井につきそうなほどの大きな本棚がいくつもあるが、そのすべてに本がぎっしりと詰まっている。

入りきらなかった本は床に平積みになされていくため、本のタワーがこの部屋のいたるところで出来上がっていた。

思えば主人の部屋の奥に入るのはずいぶんと久しい気がする。

そして、心なしか本が前に来た時よりも増えているような気がした。

「……もう少しかしら」

進んでも、進んでも。周りの風景は変わらない。

次第に不安になってきた。自分が同じ場所を延々と廻りつづけているような錯覚に襲われる。

何か楽しいことを考えねば、このままでは不安に心を奪われてしまう。

そうして、自分の脳裏に思い浮かんだのはなぜか自分の過去の出来事だった。

自分はこの屋敷に来る前の思い出にはあまりいいものはない。

自分の過去は思い出すと、非常に怒りが湧き上がってくるような不愉快な出来事のほうが多いからである。

そんな、出来事ばかり起こっていれば当然、ストレスだって溜まってくるし、鬱屈とした気分になる日も怒ってばかりいる日もあった。

そして私はある日、家出をした。

自分を取り巻く現状に対しての精一杯の反抗として私が思いついたのが 家出 だったのだ。

両親のことは好きだったから困らせたくはなかった。だけど自分は今の現状にも耐えられそうになかった。

そして、少しのお金と必要最低限の荷物を持って自分は今行くあてもなく歩きつづけた。

自分は森の中に足を踏み込んだ。

なぜ、森の中に入ろうと思ったのか、動機は忘れてしまった。

その森の中を無我夢中で歩き続けた。

気付くと、目の前に不思議な屋敷が建っていた。

その屋敷に吸い寄せられるように扉に手を掛けた。

そして。

「……リヤ、マリヤ！」

ハッと、我にかえった。自分のお腹の辺りに主人の顔が、ぴつたりとくっついていて。抱きつかれていたのだ。

主人が私の顔を見上げた。瞳にうつすらと涙の膜が張っていた。

「もう心配したんだから……」

「すつ、すいません。遅くなっちゃって」

「……食事のことじゃなくて……」

えっ、と私が聞き返すと、主人はなんでもない！ そう言って私から体を離れた。

「もう、ほら早く私の机に行こう」

「はっ、はい」

時計もカレンダーも窓も無い。時の流れが分からない。まるで外界から断絶されたようなこの空間の中。

私は目の前の不思議な少女と暮らしている。

「いただきます す！」

「いただきます」

ここが自分の居場所だと信じて

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2651ba/>

二人の少女

2012年1月6日20時52分発行